

☆第 99 回上智大学哲学会大会のお知らせ

今秋、下記の要領で第 99 回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえ
ご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2023 年 10 月 29 日（日）10：00～16：45

会場：上智大学四谷キャンパス 12 号館 102 教室

★プログラム

I 研究発表 10:00～12:10

○江藤信暁（本学博士後期課程）

初期ニーチェにおける世界把握—「弁世論」の理路—

○堤田泰成（本学文学部科研リサーチフェロー・中世思想研究所準所員）

ショーペンハウアー哲学における人格性の位置づけの再考

○浜田郷史（本学非常勤講師）

理性の限界内に自律型致死性兵器システム（LAWS）はあるか

II 総会 12:10～12:25

——休憩——

III シンポジウム 13:30～16:45（途中 15 分休憩を挟む）

○今日における〈宗教への思索〉のアクチュアリティーに向けて

— 宗教からの〈自然理解〉を一つの焦点として —

提題者：氣多雅子（京都大学大学院文学研究科宗教学研究室名誉教授）

永井晋（東洋大学文学部哲学科教授）

寺尾寿芳（上智大学実践宗教学研究科教授）

司 会：長町裕司（本学哲学科教授）

IV 懇親会 17：15～18:30（受付は17:00～）

会場：上智大学四谷キャンパス 2 号館教職員食堂

参加費：上智大学哲学科教員 4000 円

上智大学哲学専攻在籍大学院生 1000 円

本学会員 2000 円

☆シンポジウム：今日における〈宗教への思索〉のアクチュアリティに向けて

— 宗教からの〈自然理解〉を一つの焦点として —

長町裕司（本学哲学科教授）

第 99 回 「上智哲学会秋の大会」に際しての此の度の大会シンポジウムでは、『今日における〈宗教への思索〉のアクチュアリティに向けて — 宗教からの〈自然理解〉を一つの焦点として —』という題目の下、三名の先生方よりそれぞれに特有な問題脈絡の開拓によって布置され直す〈宗教への思索〉に挑む御提題をいただき、哲学的に究明の途が開かれる〈宗教〉の在り処を皆様とともに可能な限り徹底的に議論し考えを深めたい。

「宗教が問題の視野に現れる場合には、現れざるを得ない筋道があらかじめ辿られていなければならない」とは、2019 年 6 月に御逝去された上田閑照先生が〈宗教への思索〉のための道標として遺された言葉の一つであるが（上田閑照集 第九巻 『虚空／世界』、岩波書店 2002 年 11 月、142 頁）、この〈筋道〉を如何に解き明かし提示するかは今日の思索に課せられた真正な課題であろう。〈可能性の（＝からの）学〉である現象学もまた、特にその〈神学的転回〉の経験以降には、〈宗教的なもの〉の現象性を究思する思惟の躍動が見い出せる。

氣多 雅子 先生（京都大学大学院文学研究科 宗教学研究室 名誉教授）は、西田哲学および西谷啓治の宗教哲学に深い造詣を有されるのみならず、ニーチェ・ハイデガー・現象学など西洋の近／現代哲学との積極的対話を通して、今日の精神状況において宗教性を問い直す探求の在り方を探求してこられた。今回は、「霊性は大地を離れることを嫌う — 鈴木大拙の大地の思想」というようなテーマの下、大拙が『中論』や『唯識』などで論じられる思想は概念的で抽象的で最も具体的なものを指す「大地」を離れていると述べることに注目される。大地の具体性は、生命が根を下ろすところ、死んで帰るところという基底的な具体性であり、大地が恵みの場所であるだけでなく、苦しみのある場所であるということも重要であり、制度化されない原初的な宗教性を指し示す指標となり得ると大拙の霊性思想を開陳される。さらに、大地性は身体性とも通底し、ハイデガーの四方界とも響き合う要素があることも射程に取り入れてのお話となる。

永井 晋 先生（東洋大学文学部 哲学科教授）は、フランス現象学の 20 世紀後半から 21 世紀への展開を克明に追究してこられたが、同時に現象学的思惟から新たに開かれる問題構制を創造的に探究する姿勢を明確に貫いておられる。以下は、永井先生の今回の御提題内容である — 「あらゆる理論や教説を常にアクチュアルな体験として再活性化させることに存する現象学は、〈宗教的なもの〉に向かって、ユダヤの律法を私の面前に迫る他者の「顔」として、また、私の体験の根底に受肉する神を「自己触発」として、そしてそれらに通底する神の愛を「贈与」として記述してきた。しかし、これらの記述が、その徹底性と引き換えに欠いているのは、志向性や、メルロ＝ポンティの言う『見えるものと見えないもの』の差異化を通して現れるような豊かな現象の世界である。そこで、何らかの宗教的な経験をモデルとして、世界現象を遙かに凌ぐ広がりや深みを持った現象性の領野を拓くことはできないかが現象学として問題となる。ところで、神＝一がそのものとして多様な形態へと自己顕現した現象の次元を、ア

ンリ・コルバンは、イブン＝アラビーとスフラワルディーの神智学を主な手引きとして〈中間想像界(mundus imaginalis)〉として取り出した。この次元は、井筒俊彦が『意識と本質』で、東洋哲学の一つの型を特徴づける〈元型イマージュ〉として主題化したものでもある。この提題では、コルバンと井筒の議論を手がかりとして宗教的なものの現象学のもう一つの可能性とその諸帰結を考える。」

寺尾 寿芳 先生（上智大学 実践宗教学研究科 教授）は、当大学でスピリチュアルケアと死生学を御専門として御活躍の最中であられるが、剛体的な思想を展開するというよりも、今回は信仰と現実のはざまから立ち上がる一つの問題提起を行いたいという御主旨で、「老い」をテーマとする宗教的思索の可能性を提起して下さる。その中心的な要点は、以下の通りである — 「神学から始まり宗教学を経て死生学に至った個人的な学びの経緯を背景に、老いという難題を、神学的理解を尊重しながらスピリチュアリティの地平を拡大すべく考察してみたい。ライフサイクル論的に人格の完成期にあたる老年期は、神学的には神による創造の成就である安息日と重ねて解釈することができる。モルトマンによると神は安息日において被造物を経験するとされるが、大胆に想像すれば、神はイエスにおいて経験できなかった老いを老年期の人間において、たとえば心理学や教育学でいわれる老年的超越といった次元で追体験するのではないか。さらには認知症のようなリアルな問題にも神秘を見出しえるのではないか。もちろん、その現場の根底ではたらくアクチュアリティをケアのような形でリアルにシステム化することは難しく、むしろ世界の底に開いた多様な〈穴〉の保持こそが肝要かもしれない。可能ならば自然も考察に絡めつつ思索してみたい。」

☆研究発表要旨

初期ニーチェにおける世界把握

—「弁世論」の理路—

江藤信暁（本学博士後期課程）

本発表は、Fr・ニーチェ（1844-1900）の思索時期において初期と呼ばれる期間に着目し、彼が哲学というものをどのように捉えていたのかを探る。とくに、公刊著作としては『悲劇の誕生』ならびに『反時代的考察』を、遺稿としては「ギリシア人の悲劇時代における哲学」を主にとりあげ、ニーチェが「弁世論（Kosmodizee）」と呼んだ哲学的思想のありかたに注目する。

「弁世論」という語は、ニーチェの友人による造語であり、神義論・弁神論（Theodizee）をもじったものである。はじめは『悲劇の誕生』に描かれたギリシア人と彼らの悲劇芸術の思想的なありかたを指すものであったが、ほどなくニーチェ自身も遺稿のなかで、プラトンより前のギリシア思想を指すものとして用いている。そのさい、弁世論の特徴は、ショーペンハウアー思想の概念によって説明されている。こうしたことから、ニーチェの弁世論が含みうるのは、少なくともショーペンハウアー哲学と古代ギリシアの哲学だといえよう。ニーチェは、弁世論という語で、自身が高く評価する哲学的な思想を指しているのである。

さらにいえば、ニーチェは、弁世論の語をたんに哲学史上の分類のために用いているのではない。『悲劇の誕生』では、ギリシア的なありかたの当代への復古が叫ばれている。また、哲学者ショーペンハウアーを模範として提示した『反時代的考察』第三篇では、ショーペンハウアーの人間像が弁世論的な思想のなかで語られる。つまり、弁世論は——公刊著作にほぼ現れない語であるにしても——ニーチェが自身の立場とした思想のありかただといえるのである。

こうした前提のもとで、本発表で焦点をあてるのは、弁世論の内実である。ニーチェとショーペンハウアーによれば、このかたちある世界（表象の世界）は苦しみにあふれたものであるが、それでは、そのような最悪なものを含んだこの世界は、どのように弁明されるのか。このような問題へのニーチェの応答が、「弁世論」に込められている。そこで本発表では、ニーチェが自身の立場とした思想や、模範的だとした思想が、どのような理路で“弁世”のための思想だと言いうるのかを探りたい。これによって、ニーチェのテキストのなかから、世界の是認・正当化に関する彼の見解を引き出すことができよう。

また、本発表のこうした企てによって、ニーチェによる古代ギリシアやショーペンハウアーの受容のしかたについても手掛かりを得ることができよう。

＊

ゲオルク・ジンメル（Georg Simmel, 1858-1918）はすでにショーペンハウアー論の古典的地位を占めている彼の『ショーペンハウアーとニーチェ——連続講演』のなかで、「ショーペンハウアーの形而上学においては人格性（*Persönlichkeit*）という概念がまったく存在する場所を見いだしていない」と述べて、その意志形而上学が抱えているとされる弱点を指摘している。ジンメルによれば、ショーペンハウアーの物自体としての形而上学的意志は、いかなる多様性・個性・限定とも無縁な「絶対的な統一」・「世界の根本本質」であって、人格性や個性の概念は、とりわけ「共苦（＝同情、*Mitleid*）」という他者への非利己的な道徳的行為の場面において、現象の諸形式（時間・空間・因果性）を超え出た意志の形而上学的同一性のうちに完全に解消されてしまうという。

しかし、このジンメルの批判は実際のところ正鵠を射ていない。なぜなら、ショーペンハウアーは『倫理学の二つの根本問題』と『余録と補遺』において、中世スコラ学の「行為は存在に従う（*operari sequitur esse*）」という公理や「自存性（*Aseitāt, aseitas*）」の概念を援用しながら、各々にとって固有な意志（個別的意志）のうちに自由と責任性を伴った人格性や個性を確固たるものとして基礎づけているからである。ショーペンハウアーは「行為は存在に従う」というスコラ学の公理を、人格の固有性と唯一性を構成している個別的意志の存立を保障するものとして自身の倫理学のうちに導入している。また同様に彼は、本来ならば神にのみ付与される「自存性」という概念についても、個人の道徳的意識（自由と責任性）を可能にするものとして、人格性や個性が成立する上での重要な条件の一つと見なしている。しかし、これまでの研究においては、ショーペンハウアーの人格性や個性がこうしたスコラ学の公理や概念と結び付けられて論じられることはほとんどなかった。

そこで本発表では、ショーペンハウアー哲学において人格性や個性がどのように位置づけられているのかを、中世スコラ学の「行為は存在に従う」という公理や「自存性」の概念が生まれてきた歴史的な背景、およびそれらの神学的意義にも注目しながら再考してみたい。

＊

『永遠平和のために』は、小著ながらカントが平和を論じた著作として名高い。カントが、決して個人の道徳に終始するのではなく、地球規模での政治経済と結びつけながら「自律」や「義務」を論じていたことが、改めてわかる。例えばカントは、兵士が単なる道具として扱われるとして常備軍廃止を主張する。これは直ちにカント倫理学の定言命法に結びつくから、常備軍の廃止はカントにとり、議論の余地がない。

しかし、現代においてカントの定言命法と平和論の接続には、議論の余地がある。カントの時代において、戦争は人間が行うことが常識だったが、近未来の戦争においては自律型致死性兵器システム（LAWS）の利活用が考えられている。そうなれば、国民が「道具として扱われる」心配もなくなるのではないか。

そんなことは原理的にありえない、とすれば話は簡単である。しかし、（責任が不明確・一般人を識別できないなど）明らかに誤った兵器ではなく、この意味で道徳的に正しい兵器が実現できてしまったら、という仮定の検討も倫理的には有意義だろう。LAWS には多くの倫理的懸念が寄せられているが、本発表では、カントが平和を保証するとした「自然」概念との関わりを特に論じる。カントは人間の戦争欲求は感情に根ざしており、理性や道徳による統御は無理だと考えている（だから自然の摂理によって平和に至る道に頼る）。正しい LAWS は、「誤謬可能性」「情態性・気分性」を持たないので、戦争犯罪や誤射が減るという議論がある。人間的な感情を持たない AI が戦場に持ち込まれることで戦争欲求は抑制されていると言うべきか（その場合、他の理由はともかくこの点に関してカントが LAWS を否定する理由はなくなる）。もし、この結論を取らないならば、カントの永遠平和論はむしろ理性によって感情は統御できると考えたストア派の伝統に立ち返るべきなのではないか。以上の問いに答えるために、カント平和論の検討をしてみたい。